

# アセアン経済共同体とラオス

ラオス開発援助研究会 座長

鈴木 基義 編著

*Written and Edited by Prof. Dr. Motoyoshi Suzuki*

<執筆者>

寺井 義明

新村 隆之

長岡 明

須田 大

岩品 雅子

小原 ひろみ

渡井 慎也

瀬尾 充

木下 俊和

須田 裕美

園田 美和

石上 盛敏

JICA ラオス事務所発行

本書に収められた論文の論旨、提言等の内容、引用データ等はすべて各執筆者の責任において取り纏められたものであり、国際協力機構(JICA)としての公的な見解を示すものではありません。

本書は、情報の提供を目的としており、何らかの行動を勧誘するものではありません。本書は、各執筆者が信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、JICAはその正確性、完全性を保証するものではありません。本書に示された考え方などは、各執筆者による原稿作成時点でのものですので、その妥当性、信憑性等は読者ご自身で判断なさるようお願いいたします。

# アセアン経済共同体とラオス

ラオス開発援助研究会 座長 鈴木 基義 編著

## <目次>

巻頭の辞 JICA ラオス事務所長 米山 芳春.....	1
序章 知識は普及し連鎖しなくてはならない 鈴木 基義.....	3
第1章 ラオスの労働問題 鈴木 基義.....	5
第2章 ラオスの財政状況と予算法改正の取り組み 寺井 義明.....	19
第3章 ラオスの金融制度 渡井 慎也.....	39
第4章 ラオスの電力セクターの現状と課題 新村 隆之.....	59
第5章 ラオス農業の現状と ASEAN 経済統合 瀬尾 充.....	81
第6章 ラオスにおける有機農業の現状、課題と対応 長岡 明.....	106
第7章 ラオスのツーリズムの現状と課題 木下 俊和.....	122
第8章 ラオスにおける法曹養成制度改革 須田 大.....	140
第9章 ラオスにおける職業技術教育訓練の現状と課題 須田 裕美.....	153
第10章 ラオスの基礎教育開発の進展と 「学校に基盤を置いた教育行政」に向けた JICA の取り組み 岩品 雅子.....	177
第11章 ラオスにおける看護人材開発における現状と課題 園田 美和.....	193
第12章 ラオスの保健セクターの現状： 2025年のユニバーサル・ヘルス・カバレッジ達成に向けて 小原 ひろみ....	203
第13章 ラオスの寄生虫症の現状と課題 石上盛敏.....	218
執筆者一覧.....	227

## 巻頭の辞

本書は、ラオス国に在住し、同国の開発課題に関心を寄せる有志によってまとめられた「変貌するラオスの社会と経済：現状と展望」（2013年8月）、及び「ラオスの開発課題」（2014年3月）の続編であり、同書で扱われた分野の最新情報、及び同書では含まれていなかった分野の現状と課題をまとめたものである。

インドシナ半島の内陸部に位置し、四囲をベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマー、中国に囲まれたラオスは、2006年以降、鉱物資源や水力発電開発等に牽引され、年7%後半から8%程度の堅調な経済成長を示しているが、地勢、地形、人口、人的資源等の制約要因を抱え、教育や保健分野の指標が低く、未だ後発開発途上国の一つに数えられている。

ラオスは、2020年までに後発開発途上国からの脱却を目標に掲げ、経済の成長、社会や文化の発展、環境の保全のバランスを取りながら社会経済開発に取り組んでいる。2016年には、「第8次社会経済開発5ヵ年計画（2016-20）」（NSEDPP）を策定し、従前の5ヵ年計画と同様の戦略的方向性の下で、1) 強い経済基盤と経済的脆弱性の低減、2) 人材開発、貧困削減、質の高い教育・医療へのアクセス、ラオス特有の文化の保護・発展、3) グリーンかつ持続的な自然資源と環境の保護と活用、自然災害や気候変動への備えを掲げ、この成果の実現を通じて、持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けたバランスのとれた持続可能な発展を目指して各種政策に取り組んでいる。日本政府は、これらラオス政府の社会経済開発方針を踏まえ、2016年9月に日本・ラオス首脳会談がラオスの首都ヴィエンチャンで開かれ、ラオスの目指す将来像とその実現に向けた両国間の協力の方向性を示す「ラオスの持続的な発展に向けた日本・ラオス開発協力共同計画」が合意・発表された。本共同計画においては、1) 周辺国とのハード・ソフト面での連結性強化、2) 産業の多角化と競争力強化、そのための産業人材育成、3) 環境・文化保全に配慮した均衡のとれた都市・地方開発を通じた格差是正、を協力の3本柱として設定し、上記三本柱の着実な実施のため、マクロ経済・財政の安定化、法の支配の推進、行政能力の向上、不発弾除去等の横断的な課題にも取り組むこととしている。JICAは、これら開発課題の解決に向けて、有償・無償の資金協力や技術協力プロジェクトの実施、政策アドバイザーなどの専門家やボランティアの派遣と共に、日本のNGOや地方自治体、中小企業との協働による支援等を行っているところである。

本書は、ラオスの労働、金融、財政、法律、観光、電力、農業、教育、保健といった幅広い分野の課題の対応策がJICA派遣の専門家を中心としたラオスの持続的な発展を願う有志によってまとめられた。今回取りまとめられた成果は、各自の専門性を生かして、それぞれの切り口からラオスの開発問題が深く検討、分析されており、今後のラオスの開発課題を考える上で大変有益なものである。なお、本書の内容は、各執筆者が個人の立場で記載したものであり、所属組織やJICAとしての見解を示したものではありません。

最後に、本書の取りまとめに尽力いただいた鈴木基義氏を始め、論文、報告の執筆者の方々、そして研究会で議論に参加されたメンバーの皆様に心より感謝申し上げます。本書の発行により、研究会の活動により集積された知見が、JICA 関係者もちろんのこと、ラオスの開発課題に取り組む関係者に広く共有され、それぞれの活動の一助となることを期待している。

JICA ラオス事務所

所長 米山芳春

## 序 章

### 知識は普及し連鎖しなくてはならない

ラオス開発援助研究会 座長  
ラオス計画投資大臣 特別顧問  
ラオスビジネス商業大学 学長  
鈴木 基義

ラオス開発援助研究会が設立されたのは、2007年4月のことである。JICAよりラオスに長期派遣されている専門家の知識と経験を派遣先の機関の限られた空間に閉じ込めたり専門家個人の研究や経歴のなかにとどめておくのは非常に惜しいと、常日頃から感じていたことがラオス開発援助研究会設立の動機だ。知識は普及し連鎖しなくてはならない。電力事業に悪戦苦闘する専門家もいれば、ラオスの有機農業と対峙しているものもいる。ラオスの寄生虫について心血を注いで研究する専門家もいる。彼らの知識と経験を専門家自身はもとよりJICAの枠を超えて共有するのに研究会はよい機会の場合となったはずだ。研究会は、専門家自身の専門分野を超えて、専門の異なる他の専門家の知識と経験を学ぶ場を提供し、新しいアイデアや学際的な発想を生み出すよい機会となる。ラオス開発援助研究会は、発足から2008年7月までの間、毎月1~2回程度、開催されてきた。もし異なる知識と経験を持つ専門家同士で共有する研究会の活動が、成果物として書籍を公表することができるなら、専門家の枠を超え、ラオスに関心のある人々に知識と経験を普及させることができるだろう。こうして以下の3冊の書籍を刊行し、ラオス日本人材開発センターにおいてシンポジウムを開催した。シンポジウムには70人を超えるラオス在住の人々が押し寄せた。

1. 鈴木基義・山田紀彦編『内陸国ラオスの現状と課題』JICAラオス事務所・ラオス日本人材開発センター。2008年3月。
2. 鈴木基義編著『ラオスの社会・経済基盤』JICAラオス事務所発行。2008年7月。
3. 鈴木基義編著『ラオスの産業基盤』JICAラオス事務所発行。2008年7月。

月日の経つのは早いもので、書籍刊行から4年が過ぎた。ラオスが開発途上の国であるだけに発展のスピードは速く、著しい社会経済の変化のもとで、前書籍で使用したデータをアップデートするだけでも重要な社会貢献となるものと、編者は認識をもった。また同研究会の再開を望む声がかかれ、刊行した書籍のリニューアルができないかという要請を受けたところ、JICAラオス事務所との協議をもとに、同研究会の再開を決意するに至り、2012年4月から毎月1回研究会を開催してきた。ラオスに関心のある人々に、専門家の蓄積した知識と経験を共有したいという所期の想いは強く、下記の2冊の書籍を刊行した。

4. 鈴木基義編著『変貌するラオスの社会と経済：現状と展望』JICAラオス事務所発行。2013年8月。
5. 鈴木基義編著『ラオスの開発と協力』JICAラオス事務所発行。2014年8月。

『変貌するラオスの社会と経済：現状と展望』と『ラオスの開発と協力』は、ラオス開発援助研究会において、JICA専門家やシニア・ボランティア、援助関係者、国際機関職員、ラオス研究者等が闊達な議論を行い、発表された研究をもとに各発表者がその責任の下に執筆したものである。

ラオスが市場経済化に向かって舵を切ったのは、1986年のことである。ラオス政府は、11月の党大会で「チンタンカーン・マイ」（新思考）を採択し、「新経済管理メカニズム」の導入を確認した。複数為替レートの本一化や中央銀行と商業銀行の分離、価格統制の撤廃、外国投資奨励管理法の施行など、移行経済国が一様に進めた市場経済化戦略にラオスも着手した。しかし、ラオスは社会主義の政治体制を堅持したまま市場経済化を推進するという「グラジュアリズム」の戦略を採用したのが特徴である。共産党を否定するという「ショック療法」で強引に市場経済化を進めた東欧諸国では政争の域を超え内乱にまで発展してしまった。社会経済が著しく疲弊した東欧諸国とは異なり、ラオスはその後も政治的に安定した国家運営を継続することができた。ラオスは、社会主義を堅持したまま市場経済化を進める政経分離主義により、政治的な安定の基で経済を着実に発展させてきたことが自信となって、1997年のアセアン加盟に動いたと編者は思量する。反共連合として成立したアセアンに社会主義諸国が加盟することを予言した人は30年前には誰もいないはずだけに、編者には感慨深いものがある。

2015年12月31日には、アセアン経済共同体がスタートした。関税の撤廃と非関税障壁の撤廃を柱とするアセアンの新しいスキームに、ラオスもまた迅速に変革を進めなくてはならない。しかし関税の撤廃も非関税障壁の撤廃もまた、新しい共同体の取り組みであるが、実際にはすべて各国の国内問題を先決することなく着手することができない課題であるといっても過言ではない。ラオスにも国際関係と国際経済に精通した強力なリーダーが必要だ。2016年1月にはトンルン・シースリット氏が新首相に指名され、同年4月に国民議会で承認された。アセアン議長国となったラオスは、首脳会議など重要なアセアンの会議をラオスで開催してきた。同年9月に開催されたアセアン首脳会議ではアセアンの首脳だけでなく、米国のオバマ大統領や習近平中国国家主席、安倍首相も招待され、世界の注目を浴びることに成功した。

誰もが新しいラオスを感じたに違いない。ラオス開発援助研究会は、歴史の証人としてこの時代の変化を洞察すべく、本書を刊行することになった。より多くの方に情報を共有したいとの思いから、インターネット上での閲覧ができるようにJICAに要請している。

本書の作成に当たり、まず執筆者の皆様に心より感謝申し上げたい。毎回の研究会にはJICAラオス事務所牧本小枝前次長や大木扶由子所員にご出席いただきご協力をいただいた。最終校正には、JICAラオス事務所作道俊介次長、押切康志次長、町田豊所員、須田裕美在外専門調整員、青木雅基企画調査員に御礼申し上げます。最後に本書の発行に多大なるご理解とご支援をいただいた米山芳春所長に厚く御礼申し上げます。多くの方々に読んでいただければ幸甚である。